

## 成人女性のソーシャルサポートに関する研究

— ストレス経験時および複数場面におけるサポート対象に着目して —

西 田 裕 紀 子<sup>1)</sup>

### 問題と目的

成人期には、重要な転換期、例えば就職、結婚、出産、社会参加、子どもの巣立ちなどが存在する。これらの転換期は、就職すれば仕事仲間や上司、結婚すれば配偶者、出産すれば子どもなど、さまざまな人々との関係を生じさせる。特に女性は、個人的・社会的状況の変化に合わせて、社会への関わり方をより積極的に変化させていくことが重要である(茂野, 1993)こと、結婚や出産によって退職、転居するなど、それまでの生活様式の変更を余儀なくされることが多い(川浦他, 1996)ことなどが指摘されていることから、成人期全般を通じて、ソーシャルネットワークや、その心理的サポート機能は大きく変化すると考えられる。

ところで、成人女性のソーシャルネットワーク・心理的サポート機能について検討する際、以下の点を考慮する必要があると考えられる。第一に、家族を超えたネットワークの重要性である。個人のもつソーシャルサポートのネットワークは、結婚を機に自分の新しい家族を核としたシステムへと再構成される(川浦他, 1996)。しかしながら、近年、核家族化、老人世代の増加、離婚率やひとり親の微増、そして家族の範囲や父親・母親に対する意識の多様化といった変化(井上・江原, 1999; 永久, 1998)に伴って、家族の枠組みが希薄あるいは柔軟になりつつあると言われている。また、女性が社会的に活躍する場が増えて、生き方の選択肢が増加していること、発達上の心理的危機を乗り越える際に、家庭外役割としての職業や社会活動参加が重要な意味を有する(杉村, 1995; 西田, 2000)ことが指摘されていることから、家族を超えた、幅広い場でのサポートエージェントについて検討する必要があると思われる。

第二には、成人期における発達の視点の重要性である。例えば、女性が担う家庭内における役割に焦点を当てる

と、結婚しているが子どもがいない第1段階は妻役割のみであるが、長子の出産からすべての子どもが就学している第2・3段階では妻役割と母親役割をもち、その後、すべての子どもが成人期に入り独立する第4段階では母親役割を喪失するという移行過程(小泉, 1998)が示される。また、成人女性が参加する社会活動の内容として、母親役割を通じて行う活動から、一個人として幅広い人間関係や社会における共同性を生み出す活動へと移行することが指摘されている(西田, 2000)。すなわち、成人期には、家庭内・家庭外における関わりの変化に伴って、ソーシャルネットワークは質的に変化すると考えられることから、ライフステージに応じたサポートシステムの形成について検討する必要がある。

第三には、ソーシャルネットワークに伴う心理的サポート機能の内容に関する詳細な検討である。成人女性の日常的なストレスは、子どもの教育やしつけ、家族の人間関係、自分のこれからのことなど、さまざまな場面から生じることが指摘されている(厚生省, 1998)。既婚女性のソーシャルネットワークにおいて重要なのは、夫と家族以外の者とのバランスのとれた付き合い方である可能性(川浦他, 1996)を考慮すると、どのようなストレスを経験しているときに、あるいはどのような場面で、誰によってサポートが提供されているのか、またその組み合わせについて、より詳細に検討する必要があると考えられる。

以上より、本研究では、成人期全般の女性におけるソーシャルサポートの様相について検討する。具体的には以下の3点について検討する。(1) 成人女性の日常生活におけるストレス経験について検討する。その際、夫とのコミュニケーションはソーシャルネットワークの基盤として欠かせないとも言われていることから、各ストレス経験に対する配偶者サポートについて検討する。(2) 複数場面における情緒的サポート対象について検討する。その際、家族を超えた、幅広い場での対象についても扱うこととする。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

## 方法

### 調査時期と実施方法、調査対象

1999年10月に知人を介して質問紙を配布し、郵送によって後日回収した（有効回収率67.7%）。分析対象は、成人女性225名（平均年齢45.1歳，SD=8.61，MIN=25，MAX=65）。分析にあたっては、25～34歳（N=22），35～44歳（N=80），45～54歳（N=90），55～65歳（N=33）の4年代に分類した。対象者の94.6%が配偶者を有し，92.1%が子どもを有する。なお，各年代の末子の年齢は，25～34歳：3.35歳，35～44歳：9.29歳，45～54歳：18.42歳，55～65歳：27.45歳であった。成人女性のライフステージとして，末子の年齢の重要性が指摘されている（川浦他，1995）ことから，考察の際にはあわせて考慮する。

Table 1 日常的ストレス場面に関する質問項目

1. 子どもの教育や進学問題
2. 子どものしつけや日常生活態度
3. 自分や家族の健康問題
4. 家族の人間関係
5. 近所づきあい
6. 仕事上の問題
7. 社会の出来事，風潮
8. 自分のこれからのこと
9. 夫との関係
10. 家計をめぐる問題

Table 2 情緒的サポートに関する質問項目

#### [場面]

1. つらいときや困ったとき，相談するのは
2. 自分の考えや意見を率直に交しあえるのは
3. あなた自身のことをかってくれたり，高く評価してくれるのは
4. 一緒に行動して楽しいのは
5. 安心して一緒にいることができるのは
6. 自分のことを必要としているのは
7. その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思うのは

#### [対象]

- a. 子ども b. 夫 c. 自分の親 d. 夫の親
- e. きょうだい f. 親類 g. 学校時代の友人
- h. 子どもを通じた友人 i. 近所の人
- j. 仕事の仲間・上司 k. サークルや趣味の仲間
- l. その他

## 調査内容

### ①日常生活におけるストレス経験と配偶者サポート

成人女性が日常生活において経験する典型的な問題（Table 1）について，「あなたはふだん，次のようなイライラやストレスを感じることはありませんか」という教示のもとに，ストレス経験の頻度（よくある，ときどきある，ないの3件法）をたずねた。更に，「よくある」「ときどきある」と回答した経験について，その際の相談相手として夫を選択しているかどうかについて回答を求めた。なお，Table 1の項目は，厚生省（1998），川浦他（1996）を参考に収集した。

### ②場面別のソーシャルサポート（川浦他，1996）

典型的な7場面を挙げ，それぞれについてサポートエージェントとしてあてはまる対象（サポート対象）について回答を求めた（Table 2）。なお，選択数は2つ以内とした。

③精神健康調査票（The General Health Questionnaire）12項目版。4件法。12項目の平均値を精神的健康得点とした。得点が低いほど，精神的に健康であることを示している。

## 結果

### 1. 日常生活におけるストレス経験

まず，Table 1の各項目について，ストレス経験あり群（「よくある」「ときどきある」を選択）・ストレス経験なし群（「ない」を選択）の2群に分類した。成人期全般において，ストレス経験あり群が50%を越えた項目は，「子どものしつけや日常生活態度（63.2%）」「自分や家族の健康問題（66.1%）」「家族の人間関係（52.7%）」「社会の出来事・風潮（57.3%）」「自分のこれからのこと（62.1%）」であった。

次に，年代別のストレス経験率について Table 3 に示す。各項目について年代（25～34歳・35～44歳・45～54歳・55～65歳）×ストレス経験（あり群・なし群）の $\chi^2$ 検定を行った結果，「自分のこれからのこと」は25～34歳の経験率が高く，「子どもの教育や進学問題」「子どものしつけや日常生活態度」「近所づきあい」「家計の問題」は35～44歳の経験率が高かった。また，「家族の人間関係」は45～54歳，「自分や家族の健康問題」は55～65歳においてその経験率が高かった。

### 2. ストレス経験と精神的健康・配偶者サポート

次に，各ストレス経験が，全般的な精神的健康とどのように関連するのかについて検討するために，ストレス経験あり群・なし群の精神的健康得点を算出した

Table 3 年代別ストレス経験率 人数 (%)

	25~34歳 N = 22	35~44歳 N = 80	45~54歳 N = 90	55~65歳 N = 33	$\chi^2$ 値
1. 教育問題	5 (22.7)	48 (60.0)	49 (54.5)	5 (15.2)	26.01**
2. しつけ	7 (31.8)	59 (73.8)	61 (67.8)	13 (39.4)	21.67***
3. 健康問題	16 (72.7)	46 (57.5)	59 (66.3)	28 (84.3)	8.28*
4. 家族の関係	11 (50.0)	43 (53.8)	53 (59.6)	11 (33.3)	6.74†
5. 近所づきあい	5 (22.7)	40 (50.0)	27 (30.0)	11 (33.3)	13.09**
6. 仕事	14 (63.6)	35 (43.8)	41 (46.1)	17 (53.1)	n. s
7. 社会の出来事	13 (59.1)	40 (50.6)	53 (60.2)	22 (66.7)	n. s
8. 自分のこれから	18 (81.8)	53 (66.3)	51 (56.7)	18 (54.5)	6.25†
9. 夫との関係	8 (36.4)	40 (50.0)	45 (50.0)	12 (37.5)	n. s
10. 家計	7 (31.8)	46 (57.5)	45 (50.0)	11 (34.4)	7.67†

†<.10 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

Table 4 ストレス経験と精神的健康との関連

	ストレス経験なし		ストレス経験あり		t 値
	N	平均 (SD)	N	平均 (SD)	
1. 教育問題	115	1.92 (.63)	106	2.06 (.57)	1.78†
2. しつけ	85	1.87 (.59)	136	2.06 (.60)	2.32*
3. 健康問題	74	1.77 (.60)	146	2.10 (.58)	3.88***
4. 家族の関係	105	1.87 (.60)	115	2.09 (.58)	2.69**
5. 近所づきあい	141	1.92 (.63)	80	2.10 (.54)	2.05*
6. 仕事	111	1.98 (.65)	108	2.00 (.58)	n. s
7. 社会の出来事	92	1.86 (.65)	126	2.09 (.55)	2.83**
8. 自分のこれから	82	1.75 (.57)	139	2.13 (.57)	4.70***
9. 夫との関係	116	1.84 (.62)	104	2.15 (.54)	3.97***
10. 家計	113	1.88 (.60)	107	2.11 (.59)	2.75**

†<.10 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

(Table 4)。t検定を行った結果、「仕事上の問題」以外において、ストレス経験あり群>なし群であった。特に、「自分や家族の健康問題」「自分のこれからのこと」「夫との関係」は、他の項目と比較して、あり群となし群との得点差が大きかった。なお、25~34歳、55~65歳の対象者の人数が少なかったために、年代を要因に加えた統計的分析はできなかったが、年代別のストレス経験あり群の精神的健康得点を算出すると、25~34歳では「夫との関係 (2.25)」、45~54歳では「自分のこれから (2.22)」、55~65歳では「夫との関係 (2.26)」「家計 (2.28)」にストレスを感じている女性の得点が高かった。

さらに、各ストレス経験あり群 (有配偶者) が、その際の相談相手として夫を選択している割合を Figure 1 に示す。「子どもの教育問題や進学問題」「子どものしつけや日常生活態度」「家計をめぐる問題」「自分や家族の健康問題」は、50%以上の女性が夫を相談相手に選択し

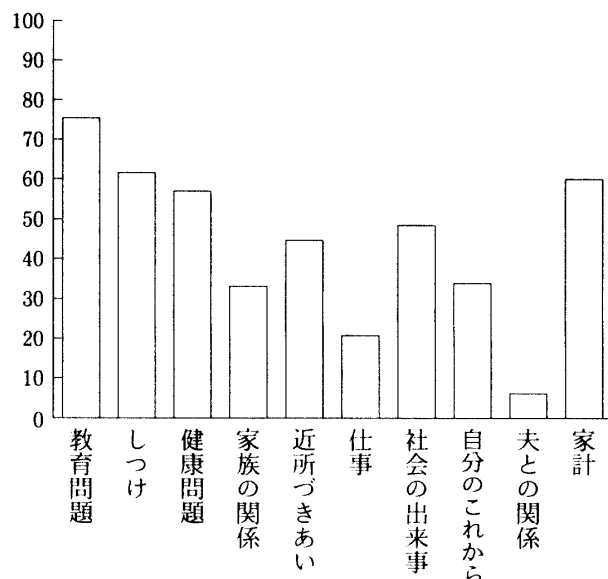


Figure 1 各ストレス経験について夫に相談する割合 (%)

成人女性のソーシャルサポートに関する研究

Table 5 各場面の情緒的サポート対象 人数 (%)

	子ども	夫	自分の親	夫の親	兄弟姉妹	親類	の友人	みの友人	近所の人	仕事仲間	仲間	恋人	その他
<u>25~34歳</u>													
1. 困ったとき相談する	0 (0.0)	11 (50.0)	10 (45.5)	0 (0.0)	1 (4.5)	0 (0.0)	7 (31.8)	2 (9.1)	0 (0.0)	3 (13.6)	1 (4.5)	1 (4.5)	3 (13.6)
2. 率直に意見をかわす	1 (4.5)	11 (50.0)	8 (36.4)	0 (0.0)	2 (9.1)	0 (0.0)	9 (40.9)	1 (4.5)	0 (0.0)	5 (22.7)	2 (9.1)	1 (4.5)	2 (9.1)
3. 高く評価してくれる	1 (4.5)	7 (31.8)	9 (40.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (27.2)	1 (4.5)	0 (0.0)	5 (22.7)	1 (4.5)	0 (0.0)	1 (4.5)
4. 行動して楽しい	6 (27.3)	10 (45.5)	4 (18.2)	0 (0.0)	2 (9.1)	0 (0.0)	8 (36.4)	1 (4.5)	0 (0.0)	4 (18.2)	3 (13.6)	0 (0.0)	2 (9.1)
5. 安心して一緒に	5 (22.7)	9 (40.9)	9 (40.9)	0 (0.0)	3 (13.6)	0 (0.0)	6 (27.3)	1 (4.5)	0 (0.0)	2 (9.1)	2 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
6. 自分を必要とする	8 (36.4)	10 (45.5)	11 (50.0)	0 (0.0)	3 (13.6)	0 (0.0)	2 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.5)
7. してあげたい	8 (36.4)	9 (40.9)	9 (40.9)	0 (0.0)	1 (4.5)	0 (0.0)	4 (18.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (9.1)	0 (0.0)	1 (4.5)	2 (9.1)
<u>35~44歳</u>													
1. 困ったとき相談する	5 (6.3)	57 (71.3)	32 (40.0)	4 (5.0)	5 (6.3)	0 (0.0)	14 (17.5)	9 (11.3)	3 (3.8)	6 (7.5)	7 (8.8)	0 (0.0)	3 (3.8)
2. 率直に意見をかわす	8 (10.0)	55 (68.8)	14 (17.5)	0 (0.0)	7 (8.8)	0 (0.0)	24 (30.0)	15 (18.8)	1 (1.3)	7 (8.8)	11 (13.8)	0 (0.0)	1 (1.3)
3. 高く評価してくれる	23 (28.8)	48 (60.0)	16 (20.0)	4 (5.0)	1 (1.3)	2 (2.5)	13 (16.3)	11 (13.8)	5 (6.3)	12 (15.0)	10 (12.5)	1 (1.3)	0 (0.0)
4. 行動して楽しい	42 (27.3)	41 (51.3)	3 (3.8)	1 (1.3)	4 (5.0)	0 (0.0)	15 (18.8)	13 (16.3)	4 (5.0)	7 (8.8)	14 (17.5)	1 (1.3)	1 (1.3)
5. 安心して一緒に	46 (57.5)	66 (82.7)	13 (16.3)	3 (3.8)	4 (5.0)	0 (0.0)	4 (5.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	1 (1.3)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0.0)
6. 自分を必要とする	70 (87.6)	59 (73.8)	12 (15.0)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0.0)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
7. してあげたい	69 (86.3)	48 (60.0)	20 (25.0)	3 (3.8)	1 (1.3)	1 (1.3)	2 (2.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0.0)
<u>45~54歳</u>													
1. 困ったとき相談する	17 (18.7)	58 (63.7)	16 (17.6)	1 (1.1)	17 (18.7)	0 (0.0)	13 (14.3)	17 (18.7)	4 (4.4)	6 (6.6)	10 (11.0)	1 (1.1)	3 (3.3)
2. 率直に意見をかわす	21 (23.1)	57 (62.6)	4 (4.4)	1 (1.1)	12 (13.2)	1 (1.1)	18 (19.8)	19 (20.9)	4 (4.4)	8 (8.8)	18 (19.8)	0 (0.0)	1 (1.1)
3. 高く評価してくれる	29 (31.9)	48 (52.7)	15 (16.5)	0 (0.0)	6 (6.6)	1 (1.1)	8 (8.8)	14 (15.4)	3 (3.3)	12 (13.2)	21 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
4. 行動して楽しい	39 (42.9)	43 (47.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.2)	0 (0.0)	24 (26.4)	26 (28.6)	7 (7.7)	6 (6.6)	22 (24.2)	0 (0.0)	1 (1.1)
5. 安心して一緒に	52 (57.1)	66 (72.5)	15 (16.5)	0 (0.0)	7 (7.7)	0 (0.0)	11 (12.1)	7 (7.7)	1 (1.1)	1 (1.1)	5 (5.5)	0 (0.0)	1 (1.1)
6. 自分を必要とする	63 (69.2)	73 (80.2)	13 (14.3)	3 (3.3)	1 (1.1)	1 (1.1)	3 (3.3)	1 (1.1)	2 (2.2)	1 (1.1)	5 (5.5)	0 (0.0)	1 (1.1)
7. してあげたい	76 (83.5)	55 (60.4)	21 (23.1)	1 (1.1)	3 (3.3)	2 (2.2)	2 (2.2)	2 (2.2)	1 (1.1)	1 (1.1)	2 (2.2)	0 (0.0)	1 (1.1)
<u>55~65歳</u>													
1. 困ったとき相談する	7 (18.9)	18 (48.6)	3 (8.1)	0 (0.0)	12 (32.4)	1 (2.7)	3 (8.1)	3 (8.1)	2 (5.4)	4 (10.8)	3 (8.1)	2 (5.4)	1 (2.7)
2. 率直に意見をかわす	9 (24.3)	17 (45.9)	1 (2.7)	1 (2.7)	4 (10.8)	0 (0.0)	7 (18.9)	4 (10.8)	1 (2.7)	7 (18.9)	8 (21.6)	2 (5.4)	1 (2.7)
3. 高く評価してくれる	11 (29.7)	11 (29.7)	3 (8.1)	0 (0.0)	2 (5.4)	1 (2.7)	4 (10.8)	2 (5.4)	2 (5.4)	9 (24.3)	6 (16.7)	2 (5.4)	1 (2.7)
4. 行動して楽しい	12 (32.4)	14 (37.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.4)	2 (5.4)	9 (24.3)	4 (10.8)	1 (2.7)	6 (16.2)	15 (40.5)	2 (5.4)	1 (2.7)
5. 安心して一緒に	16 (43.2)	24 (64.9)	2 (5.4)	3 (8.1)	1 (2.7)	3 (8.1)	3 (8.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (8.1)	6 (16.2)	3 (8.1)	1 (2.7)
6. 自分を必要とする	23 (62.2)	25 (67.6)	3 (8.1)	3 (8.1)	2 (5.4)	0 (0.0)	1 (2.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.7)	6 (16.2)	2 (5.4)	1 (2.7)
7. してあげたい	21 (56.8)	19 (51.4)	4 (10.8)	4 (10.8)	3 (8.1)	1 (2.7)	3 (8.1)	0 (0.0)	1 (2.7)	0 (0.0)	4 (10.8)	3 (8.1)	1 (2.7)

注) 2つ以下選択する複数回答形式である。

ていた。一方、「夫との関係」「仕事上の問題」「自分のこれから」について夫を相談相手に選択する割合は30%未満であった。年代別に検討すると、35～44歳において、「子どもの教育問題や進学問題（87.6%）」「子どものしつけや日常生活態度（76.0%）」を夫に相談する割合が高かった。

### 3. ソーシャルサポート対象

年代別、場面別ソーシャルサポートの選択傾向をTable 5に示す。まず、家族構成員（子ども・配偶者・自分の親・夫の親・兄弟姉妹・親類）について検討する。50%以上の割合で選択されたセルに着目すると、子どもをサポート対象とする場面は、35～44歳では「一緒に行動して楽しい」「安心して一緒にいる」「自分を必要とする」「できるだけのことをしてあげたい」、45～54歳では「安心して一緒にいる」「自分を必要とする」「できるだけのことをしてあげたい」、55～65歳では「自分を必要とする」「できるだけのことをしてあげたい」であった。また、夫をサポート対象とする場面は、25～34歳では「困ったとき相談する」「率直に意見をかわす」、35～44歳では全場面、45～54歳では「一緒に行動して楽しい」以外の場面、55～65歳では「安心して一緒にいる」「自分を必要とする」「できるだけのことをしてあげたい」であった。一方、自分の親をサポート対象として50%以上の選択率を示したのは、25～34歳の「自分を必要とする」のみであった。

さらに、20%以上の選択率を示すセルを含めると、子どもは、年代を経るにつれて、「自分を必要としている」という自己の存在価値を確認する対象としてだけでなく、「高く評価してくれる」「率直に意見をかわす」という、対等な立場のサポート対象となること、夫は全ての場面で重要なサポート対象であること、自分の親は25～34歳ではすべての場面で重要なサポート対象だが、年代を経るにつれてその選択率は低下することが明らかになった。

次に、家族外のネットワークについて検討する。20%以上の割合で選択されたセルに着目すると、学校時代の友人をサポート対象とする場面は、25～34歳では「困ったとき相談する」「率直に意見をかわす」「高く評価してくれる」「一緒に行動して楽しい」「安心して一緒にいる」、35～44歳では「率直に意見をかわす」、45～54歳・55～65歳では「一緒に行動して楽しい」であり、子どもを通じた友人をサポート対象とする場面は、45～54歳の「率直に意見をかわす」であった。また、仕事仲間をサポート対象とする場面は、25～34歳では「率直に意見をかわす」「高く評価してくれる」、55～65歳では「高く評価し

てくれる」であった。さらにサークル・趣味の仲間をサポート対象とする場面は、45～54歳の「高く評価してくれる」「一緒に行動して楽しい」、55～65歳では「率直に意見をかわす」「一緒に行動して楽しい」であった。

一方、Figure 2～Figure 5は、「夫」「子ども」「親・きょうだい（自分の親、きょうだい）」「友人（学校時代の友人、子どもを通じた友人、仕事仲間、サークルや趣味の友人）」をサポート対象として年代ごとにグラフ化したものである。以下では、家庭内・外のバランスに焦点を当てて、各年代の特徴について検討する。まず25～34歳では、「友人」は、「困ったとき相談する」「率直に意見をかわす」という相談・議論の相手としての対象、「高く評価してくれる」という自己価値を認めてくれる対象、「行動して楽しい」「安心して一緒にいられる」という時間を積極的に共有できる対象として選択されていた。「自分を必要とする」「してあげたい」という与える立場としての自己存在の確認の対象としては「夫」「親・きょうだい」が選択されている割合が高かった。一方、35～44歳においても、「友人」は相談・議論の相手、自己価値を認めてくれる対象、時間を積極的に共有できる対象として、比較的高い割合を示したが、それ以上に「夫」が全ての場面において高い割合で選択されていた。また、「子ども」は、与える立場としての自己存在の確認の対象として、最も高い割合を占めていた。45～54歳では、引き続き、与える立場としての自己存在の確認の対象として「夫」「子ども」が選ばれていたが、「行動して楽しい」という時間を積極的に共有できる対象としては、「友人」のしめる割合が最も高かった。さらに55～65歳でも、与える立場としての自己存在の確認の対象として「夫」「子ども」が選ばれていたが、「友人」が「率直に意見をかわす」という相談・議論の相手、「高く評価してくれる」という自己価値を認めてくれる対象、「行動して楽しい」という時間を積極的に共有できる対象として、最も高い割合で選択されていた。

### 考 察

本研究では、成人期全般の女性のソーシャルネットワークについて、複数場面におけるサポート対象に焦点をあてて検討した。得られた知見は以下の通りである。

まず、成人女性が日常的に経験するストレスは、「家計をめぐる問題」「子どものしつけや日常生活態度」「自分や家族の健康問題」「社会の出来事・風潮」「自分のこれからのこと」など、家族内から社会、あるいは個人の生き方をめぐる問題まで多領域にわたること、これらのストレスは、気が重くて憂鬱になる、あるいは自分は役に立たない人間だと考えてしまうなどの、全般的な精神的健

成人女性のソーシャルサポートに関する研究

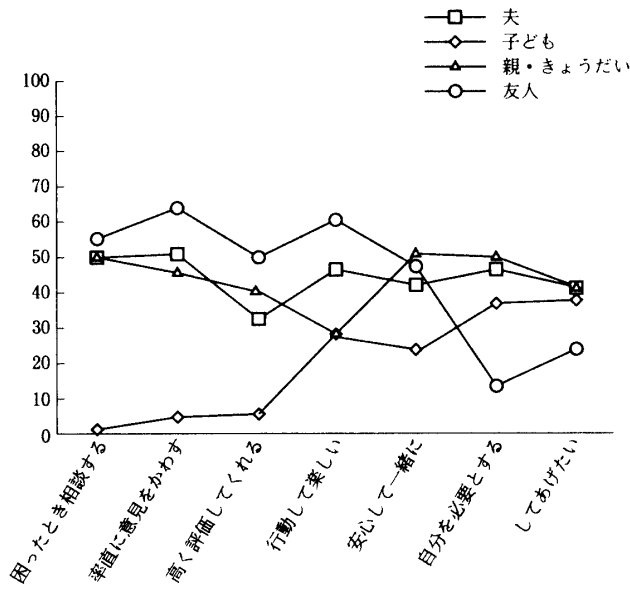


Figure 2 各場面の情緒的サポート対象 (25~34歳 : %)

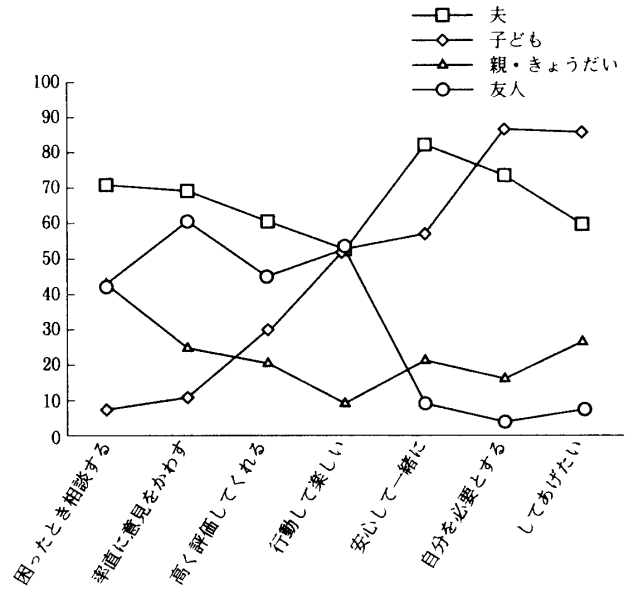


Figure 3 各場面の情緒的サポート対象 (35~44歳 : %)

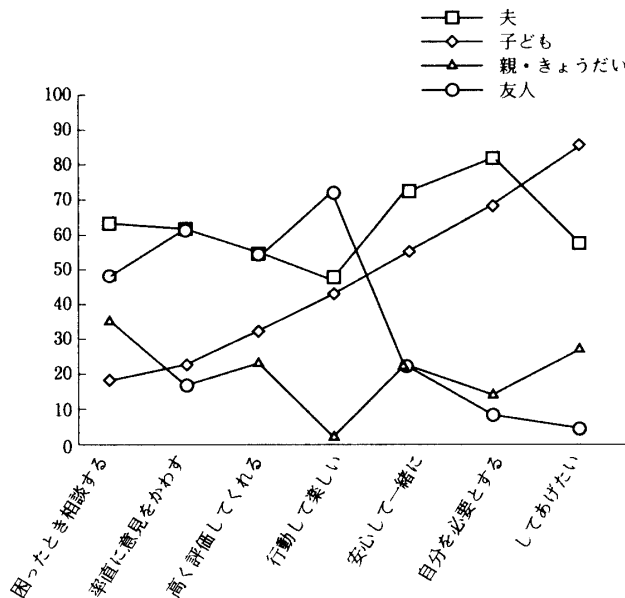


Figure 4 各場面の情緒的サポート対象 (45~54歳 : %)

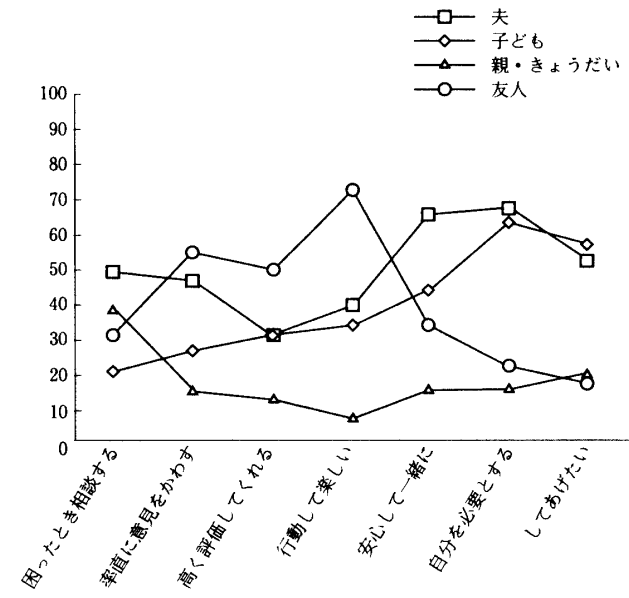


Figure 5 各場面の情緒的サポート対象 (55~65歳 : %)

康と関連することが明らかになった。

特に、「自分のこれからのこと」についてストレスを経験する割合が高かったことは、成人期の道のりには、自分の生き方、あり方に直接的に問いを投げかけるストレスや危機が存在している（岡本，1999）可能性を示唆している。また、年代を考慮して検討すると、「子どものしつけや日常生活態度」などの子どもに関わる問題は、子どもが就学時期に位置する35~44歳、「家族の人間関係」は、青年期の子どもや老齢の親との関わりが重要と

なる45~54歳（西田，2000）、「自分や家族の健康問題」は、身体的機能の衰えを顕著に感じる（岡本，1994）55~65歳において、特徴的なストレス源であると言える。

次に、ストレス経験の内容によって、配偶者を相談相手として選択するかどうかは異なることが明らかになった。すなわち、「子どもの教育問題や進学問題」「家計をめぐる問題」「自分や家族の健康問題」という、子どもや家族全体の問題に関しては、夫を相談する相手として選択する割合が高いものの、「仕事上の問題」「自分のこ

れから」という個人的な問題については、7割以上の女性が夫には相談しないと答えていた。夫が妻の生き方を理解して心理的に支えていくことが、妻の心理的安定にとって重要であると指摘されている(岡本, 1997) 一方で、夫婦生活の満足は最初の5年間は高いが、その後低下の一途をたどることを示すデータ(Santrock, 1992)もあることから、配偶者サポートはどのような場面で求められるのか、また、その精神的健康に及ぼす影響について、さらに検討する必要があると思われる。

さらに、複数場面における、家族内外の複数の情緒的サポート対象について検討した結果からは、以下のことが明らかになった。‘夫’‘子ども’は、全年代を通じて、「自分のことを必要としてくれる」「その人のためならできるだけのことをしてあげたい」という、与える自己の存在を確認できる対象として選択される可能性が高い。一方で、「自分の考えや意見を率直に交しあえる」という相談・議論の対象、「自分のことをかってくれたり、高く評価してくれる」という自己価値を認めてくれる対象、さらに「一緒に行動して楽しい」という時間や空間を積極的に共有できる対象としては、特に25~34歳、55~65歳において‘友人’の選択率が高かった。このことは、家族内の‘夫’‘子ども’と、家族を超えた幅広い場での‘友人’は、その心理的サポート機能が異なることを示唆していると思われる。また、35~44歳では‘夫’が全場面においてサポート対象として最も高い割合で選択されている一方で、55~65歳では「高く評価してくれる」「いっしょに行動して楽しい」という場面の選択率が低下していたこと、あるいは、子どもが年代を経るにつれて、「必要としてくれる」という自己の存在価値を確認する対象としてだけではなく、「率直に意見をかわす」という対等な立場のサポート対象となることは、年代によってサポートシステムの質的側面が変化する可能性を示唆している。

今後、成人女性のソーシャルネットワークの質的側面やその移行過程について、心理発達の特性も考慮して、さらに詳細に検討する必要があると思われる。

## 引用文献

- 井上輝子・江原由美子 1999 女性のデータブック第3版 有斐閣
- 川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄 1996 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート—女性を中心に— 心理学研究, 67, 333-339.
- 小泉智恵 1998 職業生活と家庭生活 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房, 186-232.
- 厚生省 1998 少子社会を考える—子どもを産みそだてることに「夢」をもてる社会を— ぎょうせい
- 永久ひさ子 1998 母親・主婦・妻であること 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房 99-148.
- 西田裕紀子 2000 成人女性の心理的 well-being に関する研究 神戸大学総合人間科学研究科修士論文(未公刊)
- 西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 岡本祐子 1999 女性の生涯発達に関する研究の課題と展望 岡本祐子(編) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房, 1-30.
- Santrock, J.W. 1992 Adult development and aging. 今泉信人・南博文(編訳) 成人発達とエイジング 北大路書房
- 茂野良一 1993 ある中年女性の生き方—中年期の心の危機 発達, 54, 45-53.
- 杉村和美 1995 ライフサイクル 南 博文・やまだようこ(編) 講座生涯発達心理学5 老いることの意味 金子書房 117-152.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

Social Support for adult women

Yukiko NISHITA

This study investigated various psychological aspects of social supports for adult women. A survey data for 225 women were analyzed, and main findings were as follows: 1. Adult women face various stress in daily life. The contents and strength of the stress is varying in different life stage. 2. In face of their children and family problems, they seek advice to their spouses, on the other hand, in face of individual problems, they are likely not to do. 3. Adult women have variety in support agents within their network, family and community. They choice differently support agents in various situations. And in different life stage, support agents of women change extensively in their social networks.

Key words: social support, adult women, support agents, social networks